

言語学的メタファー分析再考

小澤悦夫

1. メタファーをどう理解し分析するかについては無数と言っていい説が提出されてきているが、本稿では比較的新しい言語学的メタファー論の中でも特に興味深い説をとりあげ、その説に基づいた具体的な英詩の分析を批判的に検討してみたい。

Lakoff & Turner (1989) ではアメリカの代表的な現代詩人 William Carlos Williams (1883-1963) の次の詩を例としてあげ、メタファーの言語学的分析とこの詩の主題の探求を試みている⁽¹⁾。

To a Solitary Disciple

Rather notice, mon cher,
that the moon is
I tilted above
the point of the steeple
5 than its color
is shell-pink.

Rather observe

that it is early morning
 II than that the sky
 10 is smooth
 as a turquoise.

Rather grasp
 how the dark
 converging lines
 15 of the steeple
 III meet at the pinnacle –
 perceive how
 its little ornament
 tries to stop them –

20 See how it fails!
 See how the converging lines
 of the hexagonal spire
 IV escape upward –
 receding, dividing!
 25 – sepals
 that guard and contain
 the flower!

Observe
 how motionless
 30 the eaten moon

- V lies in the protecting lines.
 It is true:
 in the light colors
 of morning
- 35 brown-stone and slate
- VI shine orange and dark blue.
- But observe
 the oppressive weight
- VII of the squat edifice!
- 40 Observe
 the jasmine lightness
 of the moon.

Lakoff & Turner (1989: 以下 L & T と略) は、個々のメタファーの分析を超えて、様々なメタファーが結びつき、それらがどのような複雑微妙な詩の読みを生み出しているかをこの詩の分析を通して示そうとしており、この詩には二つのレベルでメタファーが働いていると述べている。一つのレベルでは、この詩はある光景をどのように見るべきかを論じており、別のレベルでは、この詩全体にあるメタファー的解釈を与えることができ、その解釈とは、「ここで提出されている光景をもとに、宗教の本質とは何かを使徒（弟子）に教えている」とするものである。

L & T は、英詩を理解するには、まず語学的に正確な理解が前提とされ（メタファー解釈もこの段階で特に重要なプロセスの一つ）、それをもとに、その詩の文学的意味を求めべきである（ただし、「文学的意味」が語学的理解か

ら必ず導かれるとは限らない), という趣旨の発言をしている。この考え自体は正しいが, L & T の, この詩に見られるメタファー解釈には不十分(不正確)な点がいくつかあり, 自らに課した制約(「語学者は文学的解釈にまで入り込むべきではない」)を破っており, さらに, 彼らのこの詩のテーマに関する結論は誤りであることを以下見て行きたい。

2.1 L & T がこの詩に見られるメタファーをどのように分析しているかをまずみておくことにする。まず, “the sky / is smooth / as a turquoise” [II / 9-11]⁽²⁾には, “SEEING IS TOUCHING” という基本的メタファー (basic metaphor) が見られ (eg. “He couldn’t take his eyes off me.” “Their eyes met.”), この詩行は, 滑らかな宝石の連続する触覚的肌理を何も無い空の連続する視覚的肌理に写像している。また, トルコ石の青緑色が空の青さに写像されてもいる。この両者のメタファーが同時に働いているが, 前者は “SEEING IS TOUCHING” のメタファーを介しており, 後者はイメージ・メタファーと呼び, トルコ石の色と空の色が直接結びついている。

2.2 次に, “how the dark / converging lines / of the steeple” [III / 13-15]には “FORM IS MOTION” というメタファーが働いている。例えば, “the roof slopes down” と言えば, 屋根自体は存在しているだけだが, その形からわれわれは下方に向かう動きとして理解(認識)できる。つまり, 静的形態が動的動き(形をなぞった動き)としてとらえられている。この詩行でも, 尖塔(steeple)を構成する輪郭(lines)の形態が上方に延びて小尖塔(pinnacle)で一点に収斂しているという動的な把握が可能になる。

L & T によれば, “FORM IS MOTION” によるこのようなとらえ方の上にさらに “EVENTS ARE ACTIONS” というメタファーが働くことになる。尖塔の輪郭が動いているととらえられれば, それは逃げ出そうという動きをしていると見ることができ, 小尖塔の先端にある装飾物(ornaments)は, そのよ

うな動きを止めようとしていると解釈できることになる（この点はL & Tの、この詩の意味〔宗教の本質の見方〕を決定するのに重要な働きをすることになる）。そして、止めようとする試みが失敗したことは〔III / 17-19〕や〔IV / 20-23〕に明らかだ、ということになる。

さらに、ここで詩人は弟子に、輪郭（＝形態）が逃げようとしているだけでなく、装飾物（ornaments）がそれを止めようとしていることを見よ、と教えている、とL & Tは言う。そして、止めそこなうと、逃げた線（輪郭）は上に延びて月の両側に接して月を守ることになる、と彼らは理解している。また、〔IV / 25-27〕に見られるように、ガク（sepal）が花卉を保護しているように、〔V / 28-31〕でも尖塔から延びてゆく線が月を保護しているというイメージ・メタファーにつながっている。

なお、“the eaten moon”〔V / 30〕は、欠けた月の形が「月を食べる」という行為を呼び起こすイメージ・メタファーになっており、〔VI / 35-36〕では、“brown-stone”（褐色砂岩）が太陽の色の、“slate”（粘板岩：濃い青灰色）は空の色のイメージ・メタファーになっている。

2.3 この詩の中心的メタファーは、L & Tによれば「力（force）」である（尖塔の上に延びる線を押さえようとしている尖塔の天辺の装飾物や、逃げだそうとする線などに見られる力）。この中心的メタファーが、最後のスタンザ〔VII / 37-42〕でも取り上げられている。ここでは、押しつぶされようとしている教会（squat edifice）が、「ジャスミンの香りがただよう」地上から見た空に浮かぶ月の“lightness”（明るさ・軽さ）と対比されている。月はもちろんジャスミンの花である。

3.1 この詩に見られるメタファーを以上のように分析した上で、L & Tはさらに進んで、そのようなメタファーを積み重ねて、この詩は何を伝えようとしているかという全体像を解明しようとしている。そのような全体的メタファー

解釈 (global metaphoric reading) は正当化され、意味をなすものでなければならぬのは言うまでも無い。彼らはさらに、三つの制約に従う必要があるとしている。①日常的メタファー解釈から離れてはいけない ②常識 (common knowledge) も利用すること ③形式と意味の対応 (iconicity) が、この詩の構造に存在すれば、その構造は詩全体の読みと一貫したものでなくてはならない。

L & Tは、そういう全体的読みが一つとは限らない、と言い、一つの読みの例として、タイトルが示すように、「この詩は弟子の詩人にあてたもの」と考えられ、「詩の主題である“世界”を詩人たるものどのように見るべきかを教えるもの」ともとれる、としている。ただし、彼らはこの解釈をとりあげていない。

3.2 L & Tの説は、「早朝の教会のイメージをもととし、そのイメージをどのように理解したらよいかの教え」、言いかえれば、そのようなイメージをもととした上で、「この詩が語っているのは宗教であり、宗教的信念と実践の本質を教えるもの」ということになる。と言っても、この読み自体が様々な解釈できる余地があるが、L & Tはその中で一つの読みに絞って分析を行なっている。彼らの解釈が正しいかどうかを検討するためにその説を一通りみておこう。

L & Tは、タイトルから見て、この詩は弟子に向けて書かれており、宗教という弟子とは宗教の教える真理を求める者だから、この詩は宗教的真理の探究という弟子の第一の関心事に向けて書かれたものだと言く。この狙いのために、特定の条件下で特定の教会をどのように見るかの観点から、宗教的真理とその実践の本質をどのように理解するかを比喩的に解釈すべきものとL & Tは言う。つまり、詩のタイトルからすれば、教会を即物的に見ることによりどのようにメタファー的に教会を見るべきかを弟子に教えている詩だということになる。言いかえると、宗教をあらわにもちださずに宗教の本質の見方をいか

に伝えるかがこの詩の核心だということである。

3.3 L & Tによれば、この詩全体がメタファーとしての意味をもつためには source domain (教会の外観 “appearance”) と target domain (宗教の本質 “essence”)⁽³⁾をもたねばならず、外観と本質の間に比喩的なつながりがなければならぬが、外観は即座に認識できるとして、本質はそうはいかない。どうすれば外観から本質が決定できるかといえば、以下の可能性がある。

- ①外観は本質をぼかしてしまう。(eg., “You can’t tell a book by its cover.”)
- ②外観は本質を明らかに見せてくれる。(eg., “He’s got an honest face.”)
- ③正しく観察する方法を知っていれば、外観を見ることで本質を判別できる。(eg., “A fool sees not the same tree that a wise man does.”)

そして③の見方に基づいているのが Williams のこの詩だということ。つまり、宗教的真理は物理的存在としての教会が内蔵している本質であるから、もし弟子が正しく教会の外観を観察すれば宗教的真理の本質が理解できることになる。各詩行がいかに観察するかを教えており、この詩全体が宗教の本質を正しく理解するためには教会の外観をどのように観察すればよいかを教えるものだ、というのが彼らの説である。

[VII / 37-42] の “squat edifice” は教会の建物であり、ここでは “THE BUILDING STANDS FOR THE INSTITUTION” という換喩 (metonymy) が働いており、ここで言う “INSTITUTION” は「制度化されたキリスト教」を指す。

さらに、“oppressive weight” は “DIFFICULTIES ARE BURDENS” というメタファーを通して理解される。つまり、「制度化されたキリスト教によって課された制約」を意味する。この制約は “the jasmine lightness / of the moon” と対比されるが、生きている花であるジャスミンは、制度化されたもの、例えば宗教的ドグマとは違って、その香りは軽いので地面から浮かび上がって来る。比喩的には “freedom” を表わすことになる。つまり、月を地上に引き

摺り下ろすものが何もないと同様、ジャスミンの香りを地面に引き摺り下ろすものもまたないのである。

4.1 [I / 1-6] で始まるこの詩において、なぜ教会に尖塔があるかといえば、尖塔は天（＝神）に向かっており、宗教的メタファーを即物的に具現したものであるからだ、とL & Tは主張している。さらに、月が尖塔の上に見えているのは、教会という制度（＝月が表わしている）よりも神（the divine）の方が重要だということを弟子に教えるためだとも言っている。つまり、宗教とは何かを理解するためには地上の教会という制度のみを見ているのは間違いで、空にある月（＝the divine）との関係にも心しなければならないのである。

そして、教会の輪郭線（＝花卉）は空に延びて月（＝花）を囲んで守っているものとして見なければならない。要するに、教会という制度は神（the divine）を守るために存在する、という比喩として理解すべきものである。この詩で花や花卉を持ちだしている [IV / 25-27] のは、無機物である教会とその輪郭線を有機物としてとらえなおす効果をもつ。つまり、月を花ととらえることで、月は美しく、かぐわしく、守るべきものだという理解が可能になる。

それゆえ、教会の輪郭線が花を守る花卉の働きをしていると見ることは、教会という制度を個々人の、こわれやすく貴重な神的部分（the divine part）に奉仕する大きな目的をもつものと考えられることになる。言いかえると、教会という制度の大きな目的は、神と人間との関係において、個々人の魂を守ることであり、というのがL & Tの解釈である。

4.2 月と尖塔の関係に戻ると、月は欠けている（＝不規則）が、尖塔は人工物だから正確な六角形である。月を不規則なもので見よ、という教えは、比喩的に言うと、神の本質は抽象的で完全な、生命のない教義（doctrine）ではなく、実在の不完全な生命をもつ存在だととらえよ、ということである。第二スタンザ [II / 7-11] でも、「空の滑らかさ（＝完全さ）」は二の次にして、今は早

朝だということを観察せよ、というのも、永遠ではなく移り行くものである特定の時刻に目を向けよ、という意味である。

こう考えれば、なぜ尖塔の輪郭線が動いて変化するもの、そして花卉に変わるものと見るべきだということも理解される。

5.1 最後に出てくる教え [VII / 40-42] にすべての教えが具現されているというのが L & T の結論である。“observe”には「観察する」と「遵守する」の意味があるが、それゆえに、「教会を観察せよ」→「宗教の本質を理解せよ」→「その理解を实践せよ」という教えにつながることになる。

「月の明るさ (lightness)」はジャスミンの花の色であり、“lightness”は「軽さ」にも通じ、地上から空に向かってジャスミンの花の香りが上がってゆく(=教会という制度の重さに逆らって教会の輪郭線が空に向かってゆく)イメージを伝えてもいる。

このように考えると、弟子に対する究極の教えは、教会という制度を乗り越えよ、というものになる、と L & T は主張しているのである。

5.2 ここで注意する点として、弟子への教えはすべて対比的構文 (“rather ~ than ~”, “It is true ~, but ~”) で表現されている、ということがあろう。その変形として [III / 12 ~ IV / 23] では、“rather ~”のあとに“than ~”が来なくて、“perceive ~”, “see ~”という命令文になっているが、これは“rather ~ than ~”の構文から当然予想されるものではなく、「通常の境界を越えて教会の輪郭線が延びている」ことを表わす。つまり、文構造の上からも「教会という制度を乗り越えよ」という教えを表現していることになる、というのが L & T の考えである。

6. 詩的言語は日常言語を超えたものだという通念があるかもしれないが、L & T は、そうではなく、詩的言語は日常言語と同じ概念的・言語的仕組をもつ

ているのであり、メタファーも日常的思考の一部となっているからこそ詩も独特の力がもてるのだと力説している。

そして、Williams のこの詩の場合は、これまで見てきたように、ある光景を観察することが宗教の本質を理解することになるというメタファー解釈が生じるのであり、メタファーは表面から隠れているもののもつ意味を探る手立てになる。

ただし、ここで試みた読みは文学批評（詩の歴史的な文脈・詩人の伝記・詩の伝統との関わり・政治・特定の語句がもつ含意の分析・作者の本業、など）ではなく、そのための前提作業、つまり詩を理解する時のメタファーの役割を言語学的・修辭的に分析したものだ、という断りを L & T は最後にしている。

7.1 以上が L & T の説の趣旨だが、果して Williams のこの詩は、彼らが述べているような「宗教的真理とは何か、その実践の本質をどのように理解すべきかを弟子に教えている詩」だと解釈するのが正しいのだろうか。これでは、この詩は宗教詩ということになってしまうが、Williams が宗教的な詩を書いた詩人だったとは寡聞にして聞いたことがない。むしろ物自体に語らせようとした詩人であり、イメージの喚起力を信頼して、ことばの響きを重視した詩人だ、というべきではないか。たとえば、Pearson & 金関（1976, pp.186-87）では次のように述べられている。

Ezra Pound の友人として、Pound の詩的天才の影響下に詩人となった Williams は、ある意味で Pound やそのあとで Imagism をつづけた Amy Lowell よりも、詩的資質の「視覚性」という点ではもっと徹底していた。Pound が最後まで “image” というものを大切に考えたのは事実だが、彼が1917年から書き始めた the *Cantos* は “idea” のるつぼでもあった。しかし Williams は、 “[for the poet there are] no ideas but in things” (Williams: *Autobiography*, 1951, p.390) ということを行い、詩の中につねに

“things” ないし “objects” を提示し、自らそれらに物語らせるという方法に徹底していた。Paris よりも一足おくれて、New York でも興った modernism の美術は、1913年の Armory Show を頂点として、新しい現実認識とその表現方法という面で、文学者にも決定的な影響を与え出した。早くから Paris に住んで、Picasso や Matisse と親交をもち、すでに新しい美術と文学の関係を考え仕事をしていた Gertrude Stein (1874–1946) は別格としても、Wallace Stevens, Marianne Moore, そして散文作家の Sherwood Anderson (1876–1941) その他多くの文人が、そうした新しい絵画に刺激されて、言語表現の視覚性という問題を真剣に考え出したのである。Williams もその例外ではなく、実際自分で印象派風の絵も描いたが、とくに写真家で画家でもあり、Gertrude Stein の作品をはじめ取り上げた文芸雑誌 Camera Work の編集者 Alfred Stieglitz (1864–1946) の大きな影響を受けていた。つまり、Williams は、抽象観念や論理ではなく、イメージという視覚的なものもつ瞬間的な啓示力、情緒喚起力に頼った点、他の誰よりも “a painter in words” だったのである。そして彼のばあい、とくに日常のとるに足らない風景や事件を描く点、Pound, Eliot とはちがって、Williams は “a democrat in poetry” でもあった。

そして、Williams 自身が、“To a Solitary Disciple” が含まれている詩集 *Al Que Quiere!* (1917) [意味は、“To Him Who Wants It”] についてこう言っているのである。

I was interested in the construction of an image before the image was popular in poetry. (Williams 1978, p.21)

“Gulls” is a study in sheer observation, a picture, a quiet poem, as most of the poems in *Al Que Quiere!* (ibid., p.22)

In theme, the poems of *Al Que Quiere!* reflect things around me. I was

finding out about life. (ibid., p.23)

「ことばの画家」と言われる Williams 自身が、この詩集の詩はイメージを作り上げることに興味をもってつくったのであり、純粹な観察（つまり絵画のごとき）のエチュードだと述べているのである。Williams のことばをもう少し見ておこう。

Poetry and the image were linked in my mind. And it was very natural for me to speak of poetry as an image and to write down a poem as an image and to leave it to the natural intelligence of a man. (Wagner 1976, p.52)

“To a Solitary Disciple” もまずこのような視点から向かい合うのがよいように思われる。

7.2 もちろん作者がなんと言おうと読者は自己の感じるままに作品を味わえばいいが、そのためには語学的理解やその理解に基づいた詩の解釈が不十分だったり恣意的だった可能性があるときは、やはり一步踏みとどまる必要があると思う。

Williams が「詩の民主主義者」たる所以を詩人のことばで見ておこう。

You see, the theory is, the theory is that you can make a poem out of anything. You don't have to have conventionally poetic material. Anything that is felt, and that is felt deeply or deeply enough or even that gives amazement, is material for art. (Wagner 1976, p.21)

言うまでもなく、何でも詩の対象になると言っても、それは優れた詩人の感性でとらえられ、言語表現としても芸術性を含むものでなければならない。そして、この点が Williams の詩を理解する（というより味わう）のに重要なのだが、現代アメリカ英語の口語表現を、その響きの面から楽しみ味わうことこそが求められていることを忘れてはならない。響きの心地よさを味わうことは感覚的な快感を生み出し、そこから自然に浮かんでくる理解が詩の楽しみを生む。

Williams はある詩の朗読会で次のように聴衆に語っている（1951年12月4日）。

All art is sensual. Listen. Never mind. Don't try to work it out. Listen to it. Let it come to you...Get the feeling of it...And it should be heard...

In other words, if it ain't a pleasure, it ain't a poem. [Laughter]

Williams の詩を分析する者は罰当たりということになりそうだが、彼がどれほど詩の感覚的楽しみを重く見ていたかはこのような発言からもわかるし、その点を忘れなければ、Williams の詩が「なぜ感覚的に心地よいか」を考えてみることも、特に外国語の詩であれば意味があると思える。詩の感覚面でいえば伊藤整の次の指摘も付け加えておいてよい。

詩歌の特色は、表現それ自体が感覚的な喜びとして味われることである。詩歌の中にも、行動や会話や自然描写などがあるけれども、それらが説明のために使われているのでない点が、散文と違う。その表現の言葉自体が、効果を生むのである。意味と発音またはリズムの両方から同時に与える効果が、その実質である。だから、詩歌の内容は具体的に理解できなくてもいいのであって、結果として人に与える感覚的な印象が具体的であればいい。その感覚的な訴えが、普通には韻律の中に込められているのである。（伊藤1956=2004, p.256）

7.3 Williams が宗教的な詩を書いたとは思えないし、彼はむしろそうした既成の制度（社会的約束）にはとらわれずに日常生活から詩的の真実を見出そうとしていたように思われる。たとえば次の発言にその一面が窺えるだろう。

Williams: If ordinary people have to be divided by social relationships, the artist has to get away from that to real human truth.

Walter Sutton (Interviewer): By breaking through restricting conventions?

Williams: Yeah, well – children don't respect social institutions if they have any chance to determine their own position in the world, until

they have been perverted by their elders and forced into certain categories, for instance, Catholic, Protestant. Ph-h-h, for God's sake, what is that to an artist? It's worse than idle to think about. (Wagner 1976, p.54)

Williamsにとって、宗教であれ何であれ、型にはまることだけは我慢がならないことだったわけで、カトリック・プロテスタントに限らず制度としての宗教に何の関心もなかったことは明らかだろう。“To a Solitary Disciple”に関して残る問題は、制度としての宗教（の重要性）を語っているはずがないとして、素朴な宗教心もまったく語っていないのかどうか、である。少なくともL & Tが主張しているような宗教的真理をいかに求めるべきかを弟子に教えている詩だと考えるのはWilliamsの場合まずありえないと言っていいからである。

8.1 この点を証するのに二つのポイントをあげておきたい。一つは、宗教上の弟子に“mon cher”（英語の“my dear”にあたる）と呼びかけるか、という問題である⁽⁴⁾。これはむしろ、口語アメリカ英語の典型的表現の一つである“my dear”という呼びかけをわざとフランス語にして日常性の軽さを韜晦して表現したものであり、詩全体になにげなさを与えてもいる。英語の“my dear”という呼びかけは、夫婦・恋人・親子（親が子を呼ぶとき）・年配の女性が若い女性に、など、愛情表現として使われると考えてよい（相手を見下す使い方はここでは考える必要はないだろう）。男が、年下の宗教上の男の弟子に“my dear”と呼びかけて宗教的真理について論じるということは（絶対ないとは断言できないかもしれないが）まずありえない（“my dear fellow”とか“my dear friend”などならありうるかもしれない）。つまり、ここで愛情表現としての呼びかけを使っては、この詩全体が恋愛詩になりかねないからである（恋愛詩として解釈することはそれほど難しいことではないが、後述する

ように、目の前の光景を観察することの大切さを唱える Williams の詩としては物足りなくなる)。

一方、フランス語の“mon cher”は男同士でも普通に使われる呼びかけ表現である。つまり、ここでフランス語を使ったということは、この詩で歌われていることが普通のことだということと、恋愛詩とは解釈するべきではないことを意味する。

要するに、宗教的真理の追究などという大上段に構えた詩ではなく、ある光景を見て感動し、そこに浮かぶイメージを味わってみなさい、という呼びかけととるべきだろう。わざとフランス語を使ったことに Williams のユーモアを見てとることも可能である。

なお、ひとこと付け加えておくと、Litz & MacGowan (1986, p.489) の注によれば、詩人は“disciple”として特定の人物は誰も考えていなかったという。この事実も、この詩が宗教的真理を追究するよう弟子に教え諭しているものだとはいえない理由の一つになる。さらに言うておけば、自伝 (Williams 1967) やインタビューなどを読んでも詩作上の弟子と呼べるような人間のことはまったく出てこない。この「使徒」は詩の弟子のことでないのは明らかである。むしろ、正しいと思ったら自分の考えを一人になっても大切にみなさい (目の前の光景の見方から社会制度の捉え方まで)、と言っているという解釈の方が自然である。

8.2 もう一つのポイントは “It’s true…” [V / 32] から最後まで部分に関わる。最後の部分だということは最も重要な箇所でもありと考えてよいが (内容的にも最重要部分と考えられる。この点については L & T も同意見)、ここでは “It is true A, but B” という構文を使っていることと、重層的な対比表現が見られることが特に意味をもつ。

言うまでもなく、“It is true A, but B” の表現は、「A の内容の正しさをまず認めた上で、それでもなお、話者が本当に主張したいのは B の部分である」

ことを意味するときに使われるものである。Aの部分、つまり[V / 33-36]では、まず何よりも、朝の明るい色⁽⁵⁾の中で教会の外装を成す褐色砂岩(brown-stone)の褐色(≒オレンジ色)と粘板岩(slate)の濃い青灰色(≒暗青色)がオレンジ色と暗青色に輝いている光景を「事実」として即物的に提示している。つまり、Williamsは、まず目の前の光景を事実として即物的に見ろ、と言っているのである。

しかし、この対比的視覚イメージを認識するだけでは本当にこの光景(=視覚イメージ)を「見た」ことにはならないのであり、本当に認識すべきなのは“*But*”以下である。この部分には“*oppressive*”や“*squat*”といった主観的印象を表わす語句が使われており、月をジャスミンの「軽さ/明るさ」にたとえる比喩装置が作動している。「主観的印象を表わす語句」ということは、詩人が教会にはその重さで人を圧迫する力があり、教会は自らの重さに負けてうずくまっている、と捉えているということである。

まずここで、オレンジ色と暗青色の対比(「明」と「暗」の対比)に加えて、教会の圧迫的な重さと月の対比がある。そして月をジャスミンにたとえている所では、褐色砂岩と粘板岩の色に対しては黄色という明るい色(ジャスミンの花は「明るい黄色」と、自らの重さでうずくまった教会でに対しては軽さで対比していると解釈できる。つまり“*lightness*”には「軽さ」と「明るさ」の両者の意味が含まれており、この最後の部分に見られる重層的な対比が詩的效果をあげている。さらに、早朝の光と褐色砂岩・粘板岩の色とが対比している。もちろん、対比の重層性に加えて、教会がうずくまっていると捉える比喩と、月をジャスミンにたとえる比喩が相乗効果をあげている。この点については、安井(1978, p.56)の説明がぴったりだろう。

相異なる、そして、いわば、平行線的に、文脈上よりも、たどりうる複数個の解釈が、大きな優劣関係を伴うことなく成立するのであれば、それらは、いずれも意図されたものであり、一種の増幅効果を狙って、同一表

現の中にからみ合わせたものと考えられる。

“It is true...” [V / 32] 以下のスタンザにはこれだけの比喩と重層性が見られるのであり（先にも触れた「事実と主観的印象との対比」も含まれる）、ここにこそ日常の光景を目の前にしてイメージの重層性を表現した Williams の真骨頂があると言える。読者は、この詩を声に出して読んで楽しめばよいのである。

8.3 ただし、一言この詩の主題の（文学的）解釈に触れておく方がよいだろう。私は、Williams がこの詩で言いたいことは、「制度化された宗教の重苦しさ（＝教会の建物の重苦しさ）よりも月の明るさ（＝軽さ）、つまりジャスミンの花の明るさと香りの軽さを大切にするようにせよ」ということだと思う。もっと広い意味では、宗教に限らず、社会制度のしがらみなどは気かけずに、ごく普通の日常的情景を観察することの大切さを述べていると考えられる。前述したように、彼は、この詩が収められている詩集の作品は「純粹な観察のエチュード、絵画、静かな詩」であり（Williams 1978, p.22）、「周りの物事を映している詩」（ibid., p.23）であると言い、また、詩に特有な材料（歌う対象）はなく、「深く感じられるもの、驚きを与えてくれるものは何でも芸術の素材になる」（Wagner 1976, p.21）とも言っていることから、このような素直な読みが妥当だろう。

L & T は、「教会という制度を乗り越えよ」という解釈を与えているが、私の説と似ているようで全く違うものである。Williams が宗教に限らず社会制度全体に反旗を翻しているのは Wagner (1978, p.54) で “Ph-h-h...”（バカらしい）と言っていることから見て確実である。また、L & T は “observe” には「遵守する」の意味もあるから “observe / the jasmine lightness / of the moon.” [VII / 40-42] は、「宗教の本質を理解した上で、それを実践せよ」という意味をもつ、という考えを述べているが、これはあまりにもこじつけが過ぎると言うしかない。Williams は伝道師ではなく詩人なのである。

9.1 以上の考察で重要な部分の分析はほぼ終えたと思うが、念のため、他の箇所も一通り見ておくことにする。

たとえばL & Tは第二スタンザで、「空の滑らかさ（＝完全さ）は二の次にして、今は早朝だということを観察せよ」というのは、「永遠ではなく、移り行くものである特定の時刻に目を向けよ」との意味だ、と主張しているが、むしろ、空の色という一部分にのみとらわれることなく、早朝という微妙な時間帯（月と太陽が共に存在し、空の色も日中見られるような真っ青ではない）の全体を全身で受け止めよ、という身の周りを観察することのもつ（詩にとっての）決定的な重要性を示唆していると考えの方がWilliamsの意図に沿うものだろう。

第一スタンザで、「尖塔の色よりも尖塔の先に月が斜めに浮かんでいるのを観察せよ」というのも、一部分だけでなく全体像（絵画でいう“composition”[構図]）をみてとれ、の意味に解釈の方が「画家」でもあったWilliamsに相応しい。

そして、Williamsのこの観察力は第三、第四スタンザに移るにつれて「部分のもつ意味が、全体的構図のもつ意味に関わってくる」様子を拡大して見せてくれるのである。言い換えると、全体像（＝自分の周囲の光景）の中の一部（尖塔の輪郭線と月）に視点を定めて、その関係がどう見えるのか、どのようなイメージを生んでいるのか、を描写している。

9.2 L & Tは第三、第四スタンザについては、「尖塔は天に向かっており、これは宗教的メタファーを即物的に具現したもの」であり、「月が尖塔の上に見えているのは、教会という制度よりも神の方が重要だと教えるため」であると述べ、さらに、「教会の輪郭線（＝花卉）が空に延びて月（＝花）を守っていると見るべき、つまり教会という制度は神を守るために存在する」という解釈をとっている。

しかし Williams がこのような「宗教詩」を書くような詩人ではないことは既に述べた。ここでも、「尖塔から延びてゆく線が月を守っている = ガク (sepal) が花卉を守っている」という美しいイメージを心に描いてこの詩を読めば十分だと私は思う。第四スタンザだけに3回も感嘆符が使われている⁽⁶⁾ことから、ここで描かれている光景から浮かぶイメージが詩人の想像力にもっとも強く訴えたであろうことも分かる。

この二つのスタンザでもっとも力強い表現は“See how it fails!”だと思うが、これは、拘束を振り切って空に向かって延びていくように見える尖塔の輪郭線の力強さとともに、Williams が自分の想像力の力強さを宣言した表現にも思われる（この詩は彼の詩的生涯の出発点に書かれたものである）。

なお L & T は、第五スタンザに関して、「月を不規則なもの（欠けているもの）と見よ、という教えは、神の本質は抽象的で完全な、生命のない教義 (doctrine) ではなく、不完全な、生命をもつ実在としてとらえよ、という意味になる」という趣旨を月と尖塔の関係について述べている。つまり、神性 (the divine) の本質は、制度としてのキリスト教のもつ抽象的・完全・生命のない教義ではなく、現実の、不完全な、生命に満ちた (vital) 存在であることを示している、と述べているが、これもポイントのずれた深読みだと思われる。

この表現のポイントは“eaten”とともに“motionless”と“protecting”にある。「食べられてしまった（おそらく三日月形になった）月は、力をそぎ取られて動けずに (motionless) 守ってもらっている (protecting)」のであろう。おとぎ話にでも出てきそうなこの素朴なイメージは読者の心に素直にはいつてくるはずである。

このようなプロセスを経た上で、この詩は前述した最後の箇所につながってゆく。

10. 以上みてきたように、メタファー解釈の点でL & Tは興味深いアプローチを採用し、個々のメタファー分析の面では面白い見方を提供してくれている。この点では彼らは古くからあるメタファーという現象に新しい方法論で対処したと言えるが、具体的な詩の分析となると不十分な分析、少なくとも多数の読者を納得させてくれる分析を提供しているとは言えない。

詩の解釈は語学的解釈だけでは足りないことは言うまでもない。しかし、実際には、明治時代の若き詩人たちの西洋詩理解に見られるように、不正確な語学的理解からでも、その詩の真髄をとらえることも時には可能なくらいである。この点については、前述した伊藤（1956=2004, p.256）の引用も参考になるだろう。

L & Tは、詩の文学的理解（批評）の前提作業としての分析例だと言ってはいるが、事実上は文学的解釈に入り込んでしまっていることも明らかである。詩を鑑賞する時はWilliamsが言うように、読んで楽しめばよいが、詩を分析する時は、文学批評についての必要最小限の理解とある程度の詩の鑑賞力が必要なことをL & Tのメタファー論は示しているように思われる。

注(1) テキストにはLitz & MacGowan (1986)を使用した。

(2) I, IIのローマ数字でスタンザ(連)を、1, 2の算用数字で行数を表わすことにする。

(3) “source domain” (本源領域)と“target domain” (目標領域)をL & Tの例を引いて確認しておく。たとえば“Life is a journey.”という比喩では、「人生を旅にたとえる」とは「旅の概念的特長を人生の概念的特長に対応させること」である。実際、両者の概念領域には様々な対応関係が見られる。

人生を送る者は旅人。

人生の目的は旅の到着点。

人生の選択は岐れ道。等々

つまり、旅のある特質を人生のある特質に対応させるのだが、この場合、元となる「旅」の関係や特質を“source domain”といい、これに対応する関係や特質をもつ「人生」を“target domain”と呼ぶ。

(4) フランス語の“mon cher”については野村圭介教授の、英語の“my dear”についてはKate Elwood教授のご教示を得た。記して感謝したい。

(5) この詩で歌われている時間帯は、太陽と月が同時に存在する時だから、L & Tが言うように「早朝」(early morning)としてよいだろう。これがWilliams自身の目論見なのも言うまでもない。

(6) この他に一箇所だけ感嘆符が使われているが、([VII / 39])、これは勿論ジャスマンの明るさ・

軽さと対比させて教会の暗さ・重さを強調したものである。“edifice”という固い単語の重さも加わり、前述した重層的対比イメージづくりに一役買っていると考えておけばよい。

References

- 伊藤 整 (1956), 『改訂 文学入門』(東京: 光文社 = 東京: 講談社文庫, 2004)
- Lakoff, George & Mark Turner (1989), *More than Cool Reason: A Field Guide to Poetic Metaphor* (Chicago: The University of Chicago Press)
- Litz, A. Walton & Christopher MacGowan (eds.) (1986), *The Collected Poems of William Carlos Williams Vol. I, 1909–1939* (New York: New Directions)
- Pearson, Norman Holmes & 金関寿夫 (編) (1976), 『現代アメリカ詩』(東京: 英宝社)
- Wagner, Linda (ed.) (1976), *Interviews with William Carlos Williams* (New York: New Directions)
- Williams, William Carlos (1967), *The Autobiography of William Carlos Williams* (New York: New Directions)
- Williams, William Carlos (1978), *I Wanted to Write a Poem: The Autobiography of the Works of a Poet* (New York: New Directions)
- 安井 稔 (1978), 『言外の意味』(東京: 研究社)